

盲先覚者伝記シリーズ

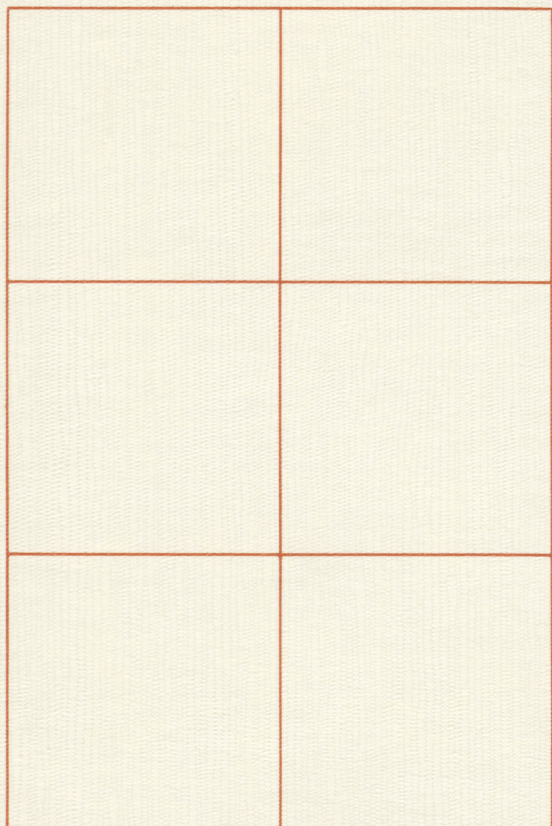
2

AKIMOTO UMEKICHI

秋元梅吉

キリストの証しそのものの人

岩島公



盲先覚者伝記シリーズ

2

AKIMOTO UMEKICHI

秋元梅吉

キリストの証しそのもの人

岩島公

推薦のことば

日本盲人福祉委員会理事長 実 本 博 次

国連が、1981年を国際障害者年に制定したことにみられるように、近年、社会の障害者観は大きく変貌しつつあります。特に、文化が深く根をおろした所では、かつてのように、障害者を憐憫の情のみで救済の対象とする風潮は消滅した、といっても過言ではありません。こうした国際的な障害者観の大きな流れの中で、わが国でも障害者の生活は、日一日と社会に統合され、生きがいのある自立したものになりつつあります。

しかし、一時代前に目を転じたとき、今でも民度の低い地域がそうであるように、障害者に対する物心両面からの抑圧は想像に絶するものがありました。視覚障害者だけに限っても、先人が残した心のひずみの記録は、いくらでも数え上げることができます。同じ障害を持ち、悩みを分かちあえる者が、自ら先頭に立って、いばらの道を切り開いていかない限り、同じ運命に悩み、苦しむ者に光を当てることができない時代であったと言えます。

わが国でも、そのように自らの障害を克服した先覚者は、多数輩出しています。視覚障害者の世界でも、古くは塙保己一、杉山和一といった偉人から、現代の盲人文化や盲教育の基礎を築いた先達まで、数え上げれば枚挙にいとまがありません。

しかし、残念なことに、ごく卓越した人物を除いて、その人の偉業と人となりを伝えるものはあまり残されていません。半ば伝説化した中で、その人の業績が風化しつつあるというのが実状のようです。特に、現代の視覚障害者の生活に直結するような業績を残した近代の先覚者に、その感が深いと言われます。じかに聲咳に接した方々の証言を、今集めておかなければ、やがて忘却のかなたに押し流され、先達の偉業を正しく後世に伝えられなくなる、そんな状況にあるように思われます。

こうした折に、日本盲人福祉研究会が、この伝記シリーズを企画し、刊行

することは誠に時宜に適し、大いに意義のあることと思います。こうした地道な仕事を続けておられる同会に対し、深甚なる敬意を表するとともに、視覚障害者の方には、先輩の不屈の闘志とそのさわやかな人生を知っていただくために、また、視覚障害者の諸問題の解決に当たっておられる方には、指針を得るための座右の書として、本書を推薦する次第です。

まえがき

日本盲人福祉研究会会長 本 間 一 夫

秋元梅吉は、クリスチャンであった。ただ一心に聖書を読み、神の命に従い、苦難があればある程、ひたすらに祈り、神の救いを一点の疑いもなく信じて、その生涯を歩み通した人である。秋元自身、こう語っている。

「私は26歳の時、内村鑑三先生に出会い、聖書を知ることによって人生観が一変し、人間秋元は完全に再生したのである。このことによって私個人の問題はすべて解決されてしまい、勢い盲人たちにとって何が一番大切かということに、心が向けられるようになり、キリストの教えを広めることこそが、自分の使命と確信するに至った。」

立派なクリスチャンであると同時に、すぐれた社会事業家としての秋元の原点は磐石の重さをもってここにある。

まだまだ未開拓の状態にあったわが国の盲人社会に、秋元の残した業績は極めて大きい。その事業を大別すると二つになると私は思う。

その一つは、秋元の生涯の前半にあたる大正末期から昭和初期にかけての点字出版事業である。その頃、点字図書の出版は未だ寥々たるものであったが、その中に、キリスト教関係図書が燦然と輝いていたのはすべて秋元の手になったものであった。内村鑑三の著書を主とするいわゆる無教会派のものが大部分であったが、特に新旧約聖書全巻の点字出版は、イギリスに次ぐ世界的快挙であった。希望に燃える当時の盲青年たちが、聖書を自らの指で読むことによって、どんなに魂を培われ、キリスト教へと導かれていったか計り知れない。私もその中の一人であった。

いま一つは、秋元の生涯を通じて行われた恵まれない盲人のための収容保護施設の経営である。これは神の前に平等であるべき人間として、特に盲なるがゆえに苦しむ者があるならば、じっとして見てはおられない、手をさしのべずにはいられないという信仰から出たものであることは、言うまでもな

い。そして、それは単なる収容保護ではなく、何とか働く意欲を持たせようとし、そこでは、今でいう生活訓練も行われていたし、法すれすれの軽作業なども試みられていたようである。そうした中で、日夜、衣食住を共にして、秋元から教えられた人々は数多くあり、その中のいくつかの人が、この書の中で当時の思い出や、秋元への尊敬と感謝を綴っている。

昭和44年10月東京光の家の創立50周年を祝う席上でのことであった。秋元は堂々とあいさつしたが、その感謝のことばは、一切神とキリストと聖書に向けられたものであって、他に及ぶところは一言半句もなかった。それが官民各界代表の居並ぶ前であっただけに、常人のなしうところではないし、これこそ秋元の真骨頂であろうと私は強く打たれたことを記憶する。

もう一つ、どうしても書き添えておきたいことがある。それは、終戦の直前、点字出版を続けるために、極度の物資不足の中で、点字用紙の配給を受けるためには、当局の強硬な指示に従って、光の家出版部とT点字出版所とは、合同しなければならなかった。そして運営は、一切T出版所に任されたのである。やがて戦後の自由の時代が来た時、誰もが予想したことは、当然両者はもとの形に帰るであろうということだった。ところが、その時T出版所の側から、そのままの形で運営を続けたいという提案がなされた。光の家側の関係者は無論大反対であった。なぜならば、長年にわたって粒粒辛苦作りためてきた聖書を始め百種を越える点字出版の原版をそのまま失ってしまうことになるからである。

ところが、秋元はこれを認めた。何らの代償も要求することなく、非難どうどうの中でついにその態度を変えなかった。これは常識を越えた秋元の大きな深い信仰なくして考えられないことであり、今となっては知る人も少ない点字出版史の一コマである。

しかし、今にして思えばその結果は、T出版所にとっても大きなプラスであったろうし、東京光の家にとっても、新時代にふさわしい事業の転換飛躍のきっかけになったように私には思われる。

秋元が残した大事業東京光の家は女婿田中亮治二代目理事長によって、み

ごとに引き継がれている。60年を越える伝統は、ますます光を増し「盲人の自立」に向かって、本格的に事業は多様化しつつある。また秋元と長年文字通り苦楽を共にされた、いく夫人が、なお健在であられることもまことによろこばしい。

最後に、秋元の長年の信仰の友であり、その伝記を書くに最もふさわしい岩島公氏にご執筆いただけたことは、何よりもの喜びであり感謝である。

目 次

は し が き	1
第一部 自ら語る生涯と信仰	
1. 創立50周年に思う	3
2. 私の最初の聖書	5
3. 日本語点字聖書の由来 秋元梅吉・伊藤福七	8
4. 真理の御霊	14
5. 喜びのおとずれ	17
6. 神 の 愛	20
7. ナザレのイエス	24
第二部 伝 記	
1. 少 年 期	29
2. 東京盲学校	30
3. 準 備 期	32
4. 盲人基督信仰会	33
(1) 西 巢 鴨	34
(2) 阿 佐 ケ 谷	34
(3) 柏 木	34
古き良き大正時代 雨池 信義	37
いこいの家 佐藤 和興	40
(4) 大 宮 前（前期）	43
5. 東京光の家	47
(1) 大 宮 前（後期）	47
東京光の家と私 渡辺万九郎	48
戦後のリハビリテーション施設となった「光の家」 粟津 キヨ	50

私の見た秋元先生	多田 収	53
秋元先生の思い出	神山 董	55
(2) 日 野		58
50年の友秋元梅吉君	鳥居篤治郎	64
聖書を土台として 建てられた光の家	渡辺 五六	65
恩 恵 の 門	吉野清一郎	66
	山本かおる	69
	山下 シズ	70
点字出版図書目録.....		73
資 料.....		76
略 年 譜.....		78

は し が き

秋元梅吉は内村鑑三門下の大先輩で、しかも最も親しくかつ心から尊敬する友人でありまた先生でもあります。

大正14年4月上京、希望社に出入りしているうち、盲人部に秋元梅吉、雨池信義という二人の盲人の居られることを知っただけ。昭和3年4月から私も内村聖書研究会に学び、たまに秋元さんの手を引くことがありました。佐久間秋夫兄の案内で、その年できたばかりの大宮前の盲人基督信仰会館を訪ね集会に出、その後秋元さんが八王子へ私を訪ね、「それが聖霊の導きというものですよ」と言ったことばだけが耳の底に残っています。

昭和9年私が福岡へ移り交わりは一時絶え、26年再び上京、日野に移った光の家へ私の方からたびたび訪ね、昭和39年4月から日曜集会の話を頼まれて今年で20年になります。

「学校をやめたら光の家へ来てくれませんか」と言われましたが、盲人伝道だけに特に使命を感じているわけではないのでお断りしましたが、秋元さんは天に召されてからいよいよ私の心の底深く働きかけるものになりました。秋元伝を書くことはのがれられない摂理のようなものを感じている時、本間一夫先生から要請があって、書くことにしました。

目的と方法

本書の目的は秋元梅吉の伝記であって、その生涯を具体的に書き伝えることです。しかしそれは、その生涯を生み出した一貫した信仰がどのようなものであったかを伝えることでもあります。それはさらに言えば、秋元梅吉を捕えてご自身を示し、彼の中に生きたもうたイエス・キリストを証しすることでもあります。

そこで本書の方法は、第一部で、自ら自分の生涯と信仰をいかなるものと自覚していたか秋元自ら語ることばの代表的なものを選んで掲げ、第二部で客観的な事実を生涯の展開に従って並べるという方法を採用しました。ただし、諸資料を筆者が全部を消化して、筆者のことばで書くという方法ではなく、

それぞれの時代に、直接に秋元にふれた人々の、見たこと聞いたこと感じたことを、本人から語っていただくという方法を採用しました。

資料の中心は現理事長田中亮治氏がまとめられた『東京光の家五十周年記念誌』と秋元いく夫人のメモ、および同夫人から聞き取ったことであります。

資料収集に御協力をいただいた方は、佐藤和興、永井実太郎、加藤善徳、佐久間秋夫、多田収、菅原栄、斉藤多祈、森田外雄、篠崎友照、小坂恵児の諸氏。

第一部 自ら語る生涯と信仰

1. 創立 50 周年に思う

1969（昭和44）年10月、『東京光の家五十周年記念誌』77歳

“キリストの福音を日本の盲人たちに伝えよう” ただこのことのみを目的とし「盲人基督信仰会」を設立したのが大正8年であった。爾来、点字図書の出版、盲人の職業指導、盲人の収容保護事業等その時代時代の必要に応じた事業を続けて来た。

昭和の初期（8年）には名称を現在の「東京光の家」と改称した。“10年ひと昔”とすれば、我々はすでに5回の“ひと昔”を過ごしたことになる。現在の日本の民間盲人福祉施設で最も年を重ねた所でも、せいぜい30年であることを思えば、感慨深きものがある。勿論長き故に価値あるなどとは夢想だにもしないが、ただこの「光の家」が50年もの間盲人福祉の灯を絶やすことなくとして来られたこと自体に何らかの意味があると思う。

私は今も盲人であるし、50年前も盲人であった。こんな私がある日内村鑑三先生との出会いにより、聖書の神を信じる人となった。これを境に私は一変してしまった。旧い私は死に、新しい私が誕生した。不平と不満の私は死に、希望と感謝の私が生まれた。内村鑑三先生からキリストの信仰を学ぶことにより、私の人生観は180度の転換をした。私自身のことはすべて解決され、私は否応なく自己以外のことに目を向けさせられた。

“日本の盲人のために最も必要なことは、一体何だろうか”と。

教育問題、職業問題、生活保障問題等々。それもこれも大切な問題であるに相違ない。しかし私はもっともっと大きな問題のあることを知らされた。それは、人間を根本から改造し、人格を高め、真理を求める精神をつくるものは何か、ということであった。私は、このことが解決されない限り、教育

問題も職業問題もいや生活問題そのものもとうてい解決されないものと考えた。

盲人である前に、先ず人間であらねばならない。これにはイエス・キリストにある信仰、聖書のこと、聖書の福音を日本の盲人たちに伝えること以外にないと考えた。これこそ日本の盲人たちの人格を高め、社会の尊敬を得る唯一の道だと考えた。この信仰に立つときに日本の盲人の直面するあらゆる問題が解決されると確信した。キリストの福音を述べ伝えること、これが私の一生の事業であった。これがひいては盲人問題を解決するための有効にして、且つ適切な方法であるとも考えた。「盲人基督信仰会」を設立したのも以上の目的にはかならなかった。私の26歳のときであった。

50年後の今日もなお、この考えにはいささかの変りはない。冒頭に述べた如く、外面的な事業は歴史の流転と申しましょうか、夫々の時代によって変転して来たが、根本精神は一貫して変ることがなかった。時代が変り、人が変り、事業が変っても、イエス・キリストへの信仰、聖書の福音はすべてのものの土台であることには、いささかの変りはない。これは不動の真理である。私はこの信仰にたつときに、日本の盲人の将来に明るい希望を持つことができるのである。

50年の意味するもの、それを一口で言うならば、「神の栄光」にほかならない。私の確信や信仰も私の努力や力によって得たものではなく、徹頭徹尾神よりの恩恵によって与えられたものである。私は唯神の命ずるままに、50年の歩みをつづけたにすぎないのである。神の御守りと御導きがあればこそ、私共の事業が多くの困難に遭遇し乍らもそれを乗り越え、今日に至ることができたのである。

私は創立50周年にあたり、直接間接に私共の事業をご支援下さった多くの方々に心からお礼を申し上げるとともに、私自身を導き、私共の事業をお守り下さった神に感謝し、今後も神の栄光を現わし給いますようお願いする次第である。

2. 私の最初の聖書

1972（昭和47）年8月26日＜東京光の家＞で80歳の誕生日祝に

それでは一言申し上げます。私は東京都の中野という所に生まれました。ですから、ここから非常に近いんです。中野で生まれまして、百姓の子供で、他の者たちとはじめはいろいろな、兵隊遊びとか、そういうもので遊んだのであります。で、私は今日は、最初の私の聖書について、みなさんに聞いていただきます。

私は、一番初め聖書を手にしましたのは、ちょうど大正の元年に台湾から二人の留学生が来ている、そのうちの一人がですね、マルコ伝を私に見せてくれまして、「あなたこれを読んでごらん下さい」とこう言う。けれども、私は聖書というものはどういうものだかということも知らない。けれども、読んでごらん下さいと言うから読んだ。そしてマルコ伝1章1節、そこを読みましてね、私の今まで感じないところの、この喜びが私に沸いてきました。で、どういうわけだかわからないけれども、その聖書の力のあるところに驚いた。これは私が、生涯読むべきものであるということを感じた。そしてそれがもとになりまして、聖書の出版が始まったんですね。で、私がこの信仰しておるというのは、キリスト教のことを言う人があったけれども、聖書を読むという人がほとんどない。いろんなことを聞きかじって理屈は言うけれども、聖書を読まない。私もそれはどういうわけだかわからないで、自分は聖書は偉いものだ、これは人間を生かす力のあるものだということを感じた。そしてそれをもとに聖書の出版を柏木で始めました。それがもとになって、少数の青年が私の心持をかけて、そうして聖書を勉強しようという気持ちを起こしたんです。今、私は80だけけれども、大正元年のことですからね、60何年前聖書を読んだ。それをね、私はあきずに読んだんですね。あきない。ある時は、もう1年に2回位はもちろん読んだ。そんなふうに聖書を読んだ。それから、今おっしゃったように、私はその次に読んだものは内村鑑三という、これはもう、非常に偉い先生の書いたものですね。これは、やっぱりあ

る琉球の人が私に雑誌を読んで聞かせてくれた。聖書について、これは非常に偉い力のある本だと私の胸について感じました。そこでね、聖書を読む、そして内村鑑三の本を読んで、まずまず私はキリスト教というものが、どういうものであるかということがわかった。他の理屈はわからないけど、それだけ、わかった。そいでね、こんどは、内村鑑三という先生に、私ども5人寄ってきて、先生にいろんなことを聞いた。先生はまず第一に、お話よりもお祈りなんだ。お祈りね、そして、どうか日本の盲人が、キリストにあってしあわせになってほしいということを祈られた。その祈りに力のあることに驚いた。5人の者がびっくり、偉い力があるもんだなということを感じた。そして、それからね、内村鑑三の書物を読む人は少なかったけど、私はずうっとそれを点訳して、いろいろ内村鑑三の書物を読んだ。そうすると聖書の次に偉い力を持っているものは内村鑑三という人の書いた書物、これは内村鑑三先生が偉いんじゃないくて、書いた書物が偉いもんなんです。そういうことで、非常に喜びを感じ、そして盲人のために、これは私に喜びを与えたものは第一に聖書とその次は内村鑑三の書物と、こういうふうに考えて、そうして聖書の出版が始まり、そうして聖書の重要な面に一生懸命読むけれども、他の人にもそれを勧める。そうして、秋元と言えは聖書の人間だというふうに言われるようになってしまったんですね。そうして、今でもそうです。さっきも話がありましたように、私から聖書とキリストの信仰をとったら、もうゼロです。今私は80歳だという。もちろん80歳という歳が私を偉くしたんじゃない。聖書と内村先生の書いた書物が偉いんです。だから、本当に盲人を偉くするにはキリスト教の聖書以外にないんだということは、自分の体験からですね、そのことを信じているんです。人が言うからじゃない、自分がそのことを経験した。自分が新しくですね、そういうふうになったんです。そうして、この今の施設の方でもですよ、これは初めからこんな大きなものじゃなかった。ちっぽけなものだった。3人か4人の人がかたまて、そしてお祈りしたり聖書の勉強したのがこんなになったんです。私は初めからいわゆる事業家であって初めからこういう仕事をやりたいと言ってやったんでなくて、私のうちに魂のいのちがのぞんだ。これはぶち殺しても死なないいの

ちで、これがのぞんだ。それで、私どもがこの盲人をよくするには、内村鑑三が本当に盲人をよくするには、お互いにキリスト教を、盲人自身がこれを学ばなければいけないということを、お祈りに聞かされたんです。そのように、日本の盲人がつまらないか、いいかというのが、違いは、キリストのいのちを得るか得ないか、これによって決まっちゃうんだ。簡単です。簡単でしょう。他の、盲人のいろいろな社会施設とかなんとかぐじゃぐじゃ理屈を言うけれど、そんなことじゃない。いのちなんです。生きたいのちですよ。キリストっていうのは、今も私がこうして話して聞いてもらっているいのちですよ。このいのちが偉いことをする。このいのちが日本の盲人を生かすんです。なにも外国へ行ってその盲人のことを見聞きしたってだめです。それで生きるんじゃないですよ。そういうことを見聞きしてくれば偉いことをしたと思ったらとんでもない間違いです。生きたいのちですよ。「われはよみがえりなり、命なり」(ヨハネ11・25)とキリストがおっしゃったそのいのちが、みなさんの心の中へ入り込んだ時、本当にみなさんは生きたものになるんです。

私は、まあ、いつお召しになるかわかりません。ちょうどこの光の家の50年の記念行事の時、その時、あっちこっち歩いた。それで体がすっかり疲れた。本当に、もう自分で、もう一ぺんもとの秋元になりたいと願っているのですがだめです。だめだけれども、私の中に生きたものは、抜けがらにならない。それが偉いことをする。みなさんもそのものを得るためにこれからこの寮で努力し、また他の寮へ行ってもそれを得るためにつとめ、それを得さえすれば、それはしあわせな盲人になれる。そんなことがあるものか、キリスト教ばかりじゃなくて、天理教もあるじゃないか、こう言う。そうじゃない。それはもう、世界の歴史が証明してるんだから仕方がない。どうぞみなさんも、静かに聖書を聞くとか、また読むとか、してですね、静かにこれを学ぶことが非常に大事です。ですから、私は、今日は、みなさんの私を喜んで下さる、これは非常にありがたいことですが、それよりもまさりて、みなさんが、私の受けたキリストのいのちにあずからんことを、私は切に切にお願いいたします。みなさんが、心から私の誕生日をお祝いして下

さった。これはひとえにキリストの力がわがうちにあるからです。それがなかったら、私なんか今頃どうしてるかわからないですよ。私は技術をやっても技術はだめなんです。うまくいかない。で、なんにしたらいいか。乞食になる。まさか、ちょっと乞食はむずかしいですね。けれども、キリストさえあれば問題は解決するんですよ。どうぞ、そういう意味において、私が大正元年、しかも台湾の一人が私に読めといった書物、いかに偉い力をもっているかを自分自身に自分で実験した。だから、これは偉い本だ。みんな盲人が、これを学ぶならば、偉大な盲人になれる。それだけ申し上げて、私の、みなさんの感謝におこたえしたいと思います。

3. 日本語点字聖書の由来

秋 元 梅 吉

伊 藤 福 七

以下は1953年5月6日晚、伊藤福七氏宅に秋元梅吉氏においでを願って、政池が二人に質問し、その答えを若い岡野行雄、諸岡順勝、久保田潔の三君に筆記してもらい、政池がまとめたものである。文責はこれらの人々にある。ただし原稿は御兩人に聞いて訂正してもらった。戦争ではほとんど失明した平野博之君も立ちあった。

私どもの作った点字聖書の由来を御話し申し上げる前に、それ迄に出来ていた外国の点字聖書に就いて一言します。

1825年フランスで点字が発明されて1849年トマス・ア・ケンピスの「キリストの模倣」がフランス語点字として出版されました。それから4福音書が出版されました。しかしフランスは旧教国で、聖書を一般信者に読ませる事をしないものですから、それ以上点訳されませんでした。然るに英国は新教国で聖書を一般人が読みたがりますので、アイルランドの半盲の眼科医新教徒アーミテージの尽力により1878年から始めて1881年に旧新約聖書の英語点字本が完成したのであります。私どもが旧新約全部の日本語点字本を完成した時（1924年）にはこの英語版の他、世界中どこにも完全な点字聖書はな

かったのであります。それで完全な旧新約聖書は日本が世界で第2番目に持ったのであります。しかし日本語点字聖書の特長は、これが全部盲人の手によって打たれたと云うことでありまして、英国のは目明きによって打たれたのであります。

もっとも日本語聖書の点字本は私どものが初めてではなかったのでありまして、新約聖書はずっと早くから出来て居りました。1894年（明治27年）に当時はまだ横浜にあった米国聖書会社（今日は英国聖書会社と合併して日本聖書協会と云う）の手によってヨハネ伝が出版されました。点字出版物としては日本でこれが最初のものであります。このヨハネ伝出版の由来は、1889年（明治22年）日本に渡来したメソジスト教会宣教師ドレーパーが、寒い冬の夜、盲人が悲しげな調子の笛を吹きながら杖をたよりに歩いている様を見て、盲人救済を志したことに始まります。彼は横浜に訓盲院を作り、盲人を集めて教育をしました。そして聖書を教える為に点字聖書の必要を痛感しまして遂に点字ヨハネ伝の出版を聖書会社にすすめたわけでありまして。つづいて数年の間にマタイ、マルコ、ルカ、使徒行伝と出版されました。ロマ書以下は大正4年に完成しまして、新約聖書全部で11冊、1冊50銭でした。

ヨハネ伝の出版は、人が盲目に生れたのは前世の罪の因果だと云う暗い仏教の宿命的人生観から、盲人を解放し、親の罪にも、己の罪にも非ず、ただ神の業の現れん為なりと云う事を教えまして、吾々に明るい、力強い、希望と自信とを与えてくれたのでした。

その後日本語新約聖書が大正6年に改訳されましたので点字のも改訳の必要が起りまして、半盲の実業家^{よしもとたす}好本督氏の尽力により大正9年にそれが完成しました。その出版にあたって好本氏は亜鉛板の代金を出資し、製版は岐阜の訓盲院の生徒がし、出版は神戸の英国聖書協会がすると云う三者の協力によって出来たのであります。但し訓盲院の生徒には好本氏がいくらかの謝礼金を出して下さいました。全部で9冊、1冊75銭のところを好本氏が45銭を負担されましたので、1冊30銭で、我々の盲人キリスト信仰会を通して売り出されました。その次の年大正8年には詩篇（上下2冊）が出来ました。

新約聖書が出来たので旧約聖書をも自分の指で読みたいと云う希望が私た

ちの間に起って来ました。ことに秋元は何とかして点字旧約聖書がほしいと思ひまして人に読んでもらって自ら点字に打ったり、又、金を出して目明きの人に打って貰ったりしました。こうして4年位かかって大正6年には全旧約を持つことが出来ました。その時の喜びは何物にもたとえようがなく、この恵みは一人で私すべきでない、全日本の盲人に完全な聖書を持たすべきである。その為にはぜひ之を出版せねばならぬと思うに至りました。そしてある時は中野の塔の山町にあった宝仙寺附属の三重の塔の下で、又ある時は戸山ガ原の真中で草に埋れて祈りました。昼は人がいるので夜祈ったのですが、今はアパート街である戸山ガ原はその当時は広い広い草原で、夜路を迷って朝まで家に帰れなかったと云うようなこともしばしばありました。

そこで私たちは大正9年秋、米国聖書協会（その頃は東京の銀座に移っていた）に勤めている大竹大五郎氏と云う盲人に理解のある人を通して聖書協会に点字旧約聖書の出版を願い出たのであります。米国聖書協会の代表アウレル氏は大変のり気になり米国の本部に承認を求めれば多分許可してくれるでしょうと云って、直ちに創世記を打つに足る位の亜鉛板を買ってくれました。然るに米国聖書協会の本部では、当時は英国聖書協会と日本を東西に分けて別々に聖書を頒布していたので、英国聖書協会の本部の方にその費用の半分を受持ってくれと申出ました。当時好本氏は英本国の聖書協会の委員でありました。その頃英国人でない英国聖書協会の委員は好本氏ただ一人であったのです。それで英本国の委員たちは好本氏の話を書いて日本語点字聖書の出版にはほぼ賛成したのでありますが、一応日本にいる宣教師（英国聖書協会日本代表パロット）の意見を徴しました所パロット氏は其必要なしと答えましたので英国聖書協会では「ヨブ記と創世記だけ位ならよいが、全部は賛成できぬ」と米国聖書協会に返事し、米国聖書協会も単独では出来ぬ旨アウレル氏に通知して来ました（大正11年夏頃）。併し私たちのどうしても旧約全体を自分の手で読みたい、と云う熱望は益々盛んになりまして、遂に、聖書協会の出版してくれるのを待っていたら何時迄たっても出来ないから、一つ我々が自分の手で作ろうではないか、と云うことになりました。この運動の中心になったのは、秋元梅吉、伊藤福七、平方龍男氏等でありました。

しかしこれは実に大きな冒険でありまして、英国でさえ目明きの力で漸く出来、他の国にはどの文明国にもないと言う大冊の点字出版を、日本の盲人だけでやろうと決心したのであります。しかし、私たちはやり始めれば必ず神様が援けて下さるに違いないと信じたのであります。

そこでその製版は誰に頼もうかと云う事になったのですが、最も優秀な腕を持って居られる伊藤福七さんをお願いしようと言う事になったのです。伊藤福七さんが盲学校出でないで反対した人もありましたが私は敢えて伊藤さんにたのみました。

(以上主として秋元氏の話、以下主として伊藤氏の話)

これまでの活動は殆んど秋元さん一人でされたので、私(伊藤)は余り深く関係していなかったのであります。私は秋元さんと同居していたのですが秋元さんは或時私に突然、「伊藤君どうだ、聖書点訳のために死なないか」と言われるのです。点字版用の垂鉛板に穴をあける仕事は、手と足と頭とを酷使せねば出来ないもので、実に難しく、それまでもその為の大抵の人が病気になる、中には死んだ人もありました。旧約聖書は実に大冊ですから、病気になる恐れは充分あったのです。しかし私は聖書の為なら死んでもいいと思ってお引受けしました。こうして1922年(大正11年)8月、盲人キリスト信仰会のメンバーである秋元、伊藤、平方、山下、浦部、池田、三輪の7盲人が大久保の秋元、伊藤の同居している家に集まって祈禱会を開き、その後で点字文の綴り方文法を定めました。それは伊藤が出した原案を他の諸氏が修正したのです。そしてその年の11月6日にその家で伊藤は創世記第1章第1節から打ち始めました。読み手は山岸壬五氏の妹で半盲の山岸初江さんになってくれました。山岸壬五氏は内村先生の忠僕でその頃は、聖書研究社の事務をとるかたわら新宿の近くの成子坂で本屋を開いていました。私はどの一字によって盲人が信仰を起すかも知れないと思いましたので、一点一点祈りながら打って参りました。

こうしていよいよ着手した時に好本さんが英国から来られましたので11月の末に秋元が兵庫県の芦屋に氏を御訪ねし、私たちの決意と着手した事を話しましたところ、大賛成して金は何とかなるでしょうと言われました。そし

て製版者と読手の生活費を保障して下さる事になりました。

さてこうして盲人が自らの力でこの大事業にとりかかったものですから、米国聖書協会の方でそれを知って大変驚きました。そして、アウレル氏はそれでは出エジプト記以下の亜鉛板もこちらで買ってあげましょう、出版も引受けます。しかしこれは米本国にある本部に承認して貰わなくてはならないが本部がもし反対したら私がその費用を負担しましょうとまで言うてくれました。本部では氏の報告を読み私たちとアウレル氏の熱心に驚き遂に承認してくれました。この報告が届いた時伊藤はすでに創世記第40章を打っていたのであります。

創世記は1カ月かかって完成した大正12年5月に売出しました。秋元、伊藤、山岸の3人は1冊出来る毎に感謝の祈りを捧げました。ところが好本氏は点字聖書の製版と云うような恵みはあなた一人で受けるのはもったいない。他の人にも其恵みをわけて上げなさいと言って岐阜の訓盲院にエレミヤ記の製版をおさせになりまして之が大正12年9月出版されました。訓盲院ではその他にサムエル前後書をも製版しましたが、それ以外のものは全部伊藤一人の手で製版しました。こうして1924年（大正13年）12月22日に旧約の全巻が完成しました。全部で23冊、各冊30銭で売り出しました。訓盲院で打ったのは読みづらいのでその後エレミヤ記もサムエル前後書も私が打ち直しました。

出版費は1冊1円位でしたから30銭で売っては安すぎますが、その損失は米国聖書協会が引受けました。その頃は毎年100部位売れましたから1年に1,600円位づつ米国聖書協会が損をしたのです。その他の費用は、製版に必要な亜鉛板が全部でその時の金で700円で、これも聖書協会が受持ちました。それよりも多くかかったのは製版者である伊藤及び助手の大正11年から13年までの生活費で総額2,000円かかりました。之は好本さんが引き受けて下さいました。

私は1字の誤植もないように努めました。中には墨字の聖書で間違っている所でも点字聖書の方では正しいと云うようなところも出来ました。例えばエステル書1・1に172州と云うのがありましたが、これは127州の誤りでありました。又レビ記のある箇所には山羊とありましたがこれは小羊の誤り

です。その他濁音などの誤植は無数と云っていい程沢山あります。これは聖書をたんねんに読んで行くと筋が通らないので気づいたわけでありました。そう云う時には英語の聖書を調べまして正しい方にしておきました。それで我々が点字の旧約聖書を声を出して読んで、そう云う箇所に来た時、目明きの牧師さんなんか、私たちが読みちがえたのだとか、点字の打ち方が違っているのだと言われましたので、いやそうではない、あなたの持っている聖書の方が違っているのだと説明して上げたり致しました。

旧約聖書が終ったので、こんどは新約聖書の製版を始めました。新約の方は前述のようにそれまでにも出来ていたのですが、更によいものを作る為に伊藤が打ち直したのです。最初にいわゆる「もと訳」を打ち直しました。これは大正15年に出来ました。改訳の方は昭和6年に打ち直しました。その頃は私も慣れましたので他のもの例えば中等学校の国語教科書などを点字に直すかたわらやったのですが新約全部を1年間に仕上げてしまいました。

尚旧約は初めは悪い機械でし、後半になってよい機械を買ってしまして、前半のは出来が悪いので、昭和4年から5年にかけて前半の全部私が打ち直しました。

点字讃美歌の歴史は大正8年4月から盲人中村京太郎氏の主宰する点字週刊誌「あけぼの」の附録として讃美歌が連載されたのが始まりであります。大正11年2月にこれがまとめられて1冊の本になりましたが、之は抜萃ではありません。併しそれは版が磨滅したので私が新しく打ち始めました。これは大正14年に完成しましたが、その後、讃美歌が改訂されたので1931年（昭和6年）に伊藤がそれを全部製版しました。それは大冊ですので持歩き用にその翌年抜萃を作りました。その選定は由木康氏におねがいましたのです。

点字聖書出版に当って内村鑑三先生から御奨励をいただいた事は多大であります。列王紀略を製版している頃です。先生は秋元と伊藤とを招いて「之でマンジューでも買って食べ給へ」と言って金30円下さいました。当時10円あれば1人の1カ月の食費に足りたのですから之は大金です。その時先生は「どうも俺の所の集会の連中は君たちの事業に冷淡だ。集りには来るが信仰はわかっていないんだ。彼らに君たちの事を話して募金したのが成績がよくな

い。君たちのやっている事は実に尊い。君たちは点字聖書を作るからなどとタイコをたたかないで黙々としてやっている。そこが偉いのだ。計画準備が万事ととのってからやろうとしたら出来なかったろう」と申されました。私たちは之により非常な力を覚えて之を完成したのです。又完成した大正13年12月22日の感謝会には盲人30名ばかりが集りましたが其時も内村先生も御出で下され実に感銘深い御話を賜りました。点字聖書の出版については教会方面からの寄附はありませんでした。(終)

附記、伊藤福七氏は最も優秀なる点字製版者である。下手に打ったものは読みづらく、また、多く印刷すると亜鉛版が磨滅するのだが、伊藤氏のは未だ使用にたえる。点字の文法、点字の打ち方等の模範、規準とされている。(編者)

(政池仁主筆『聖書の日本』205号)

4. 真理の御霊

1962(昭和37)年2月17日(土) 平方龍男氏宅日本キリスト信仰
会主催第1回聖書研究会で 70歳

今日は平方さんの尽力で、私ども信仰の古いお友だちがよりまして、話し合う機会が与えられましたことは、大変うれしく思います。信仰のない人は、こうして集って来ると、自慢話で終わってしまいます。そうじゃなくて、いつまでも若々しく、そういう気持で集ることができて感謝であります。平方さんは私よりも上なだけけれど、いつも元気でやっていらっしゃる。うれしいような、うらやましいように思っているんですが、真理はみんなそうなんです。過去の偉いことばかり言って、将来のないような人はみんな抜けがらなんです。そういう意味で、私は、今日は本当に感謝です。

私ども古いお友だちはたくさんいますけれど、まあ東京で中村さん、平方さん、私、これはよく金助町でも会って、信仰の問題、教育の問題と、盲人界の問題を話し合ったことでした。そのうちでも、何といっても聖書がほしいということがみんな思っていて実現されたわけですね。

で、今日は、私が、自分が感じておりますヨハネ伝14章16、17節にこういうことが書いてある。

わたしは父にお願いしよう。そうすれば、父は別に助け主を送って、いつまでもあなたがたと共におらせて下さるであろう。それは真理の御^み霊^{たま}である。この世はそれを見ようともせず、知ろうともしないので、それを受けることができない。あなたがたはそれを知っている。なぜなら、それはあなたがたと共におり、またあなたがたのうちにいるからである。

この真理の御霊、聖霊ですけれども、私どもこの聖霊は、前には宗教の人にだけ下ると思っていました。が、今は私はそうじゃないと思いますね。真理の御霊は科学者に下ると本当の科学者になる。哲学者に下ると生きた哲学者になる。また教育者に下ると本当の教育者になる。ペスタロッシーなどは、真理の御霊を受けた人だと思っています。そういう意味からして、日本の盲人に対して希望を持つのは、御霊が盲人に下る時に、それは思わぬことが出てくるのだと思います。私ども今から40年前に、今でも盲人界に御霊は下っていますけれど、あの時分確かに御霊が強く下っていたんですね。そうして仲良かった。そうして一つになっていました。もう平方さんところへ行っても、うちへ行ったと同じで、御飯を食べて話す。もう非常に仲良かった。信仰のことも言っていたけれど、仲良かった。一つだった。そして事業ということはあまり考えなかった。どうかしてその神様に近付こうとした。それから信仰というものは行いが伴うのは当たり前だけれど、われわれは信仰したために事業をしようとはあまり思わなかった。本当に信じて足りていた。そういう意味で、この御霊が下るとするのは、宗教家の専有物ではないと思う。それで鍼をする人でも、御霊が下ると本当に偉い鍼医者になる。また音楽家に下ると偉い音楽家になる。そういう意味で日本の盲人の将来に希望を持つことができる。

(注)

それからもう一つ罪の問題です。何ができて、罪のわからない人間はダメです。それが大事。事業なんか後の後の後です。罪がわからないのはどうかしているんです。問題は自分の罪をどうして十字架において片付けていたかどうかという問題です。今はそうじゃなくて、キリスト教は何か事業をやら

なきゃクリスチャンでないように思っている。そりゃあいかんですよ。本当に自分の罪をどうしたらいいかということをもっともっと考えなくちゃいかん。ごまかしてはいかん。何か事業をやって、それでクリスチャンでござるなんと言ったって、そんなことではどうしても神様の前には通りぬけることはできないんです。年寄りぶって言うのじゃないけれど、もっとね、罪の問題をどうしようかということは、平方さんもよく知っていますよ。平方さんも罪のために泣いていました。われわれもそうだった。だから、おかげでこうやって細々ながらも信仰を続けられているんです。いわゆる事業の奴隷にならない。なぜか、罪の問題を解決しなけりゃだめだ。日本の盲人界にです。ね、いろいろの問題があるけれど、キリスト教のかさかぶって事業してる人間がたくさんある。そうじゃない。罪をどうするか。これを誰が解決して下さるか。十字架へ持って行くよりほかないんだ。私どもは戸山が原へ行って泣きました。どうしてこれが解決できるか。ライ病のような罪を、いいかげんな事業だとか、学問で解決できないんだ。エス様の前に行ってどうしたらいいのかと真剣なんです。今でも真剣ですけど、もう少し若い時はもっと真剣だった。そのことがごまかしできない。われわれよく言う。本当に、クリスチャンの間に事業屋がたくさん出てきた。これではだめです。本当の事業は、罪を悔い改めてその後起こる。その後には花が咲いて実がなってくる。そうしたなら、アメリカの信者にも、英国の信者にも負けません。彼等の人後に落ちません。罪の問題をいいかげんにしているから彼等が偉く、こちらがつまらないということになる。だから私どもはこの時に当りまして、われわれはじめ本当に罪の問題を神様の前に行って、どうしていただいたいんだらうということを探ねる。これが若返る最もいい方法なんです。どうぞみなさん、われわれは神様の前に謙遜にならなくてははいけません。ごまかしてはいけません。それはだめだ。どうかそうして、宗教家は専門家も平信徒もあったもんじゃない。みんなキリストの前へ行ったら専門家も平信徒もあったもんじゃない。本当にエス様の十字架でもって私どもお赦しいただきたい。他に何も言いわけは持っておりませんということを言えますか。言わなくちゃいけないんです。どうも、私はそれが伝道だと思う。それが証しだ

と思う。証しはないことを言うんではない。人のことを言うんじゃない。自分のことを言うんです。私は罪人のかしらだということが証しです。それがない人間は証しのない人間です。それがキリスト教なんです。どうかこの古いキリスト教に、も一度かえって、そうして事業屋のキリスト教にならないで、いのちがけでキリストを信じ、いのちがけでこの御霊を受け取る。この御霊を何ものとも換えない。勲章であろうと、どんな名誉であろうと、キリストの御霊とは換えない。これと換えてはいけない。これと換えた人はたくさんいるでしょう。事業は成功したなんといっって、キリストの御霊なんてなんだと思っている人がある。情ないですよ。そんなつまらないちっぽけな考えを持っていたはいけない。このキリストの御霊だけはいのちをかけてもこれとは取り換えてはいけない。家庭がこわれるかもしれない。大事な友達と別れるかもしれない。けれども、この御霊だけとは換えられないと、われわれは新しく覚悟しなければならない。

私はたくさん申し上げなければならないことがありますけれども、これだけ申し上げて失礼します。

(注) 罪を示し、十字架による罪の赦しを示すものが真理御霊、聖霊。

(ヨハネ16・8、1コリ12・3)

5. 喜びのおとずれ

1963(昭和38)年「東京光の家」で 71歳

ナホム書第1章15節

見よ、良きおとずれを伝える者の足は山の上にある。彼は平安を宣べている。ユダよ、あなたの祭を行ない、あなたの誓願をはたせ。よこしな者は重ねて、あなたに向かって攻めてこないからである。彼は全く断たれる。

キリスト教の伝道は感謝の祭事であります。われらの伝道はキリストの愛に励まされてであります。われらは沈黙を守らんと欲して守りきれないからであります。われらがごとき罪人を救いたもう神の恩恵を考えて、いても立っ

てもいられなくなるからであります。キリスト教の伝道は義務ではありません。特権であります。快樂であります。敵人の口調をかりて言えば、「道楽」であります。「もしわれ福音を宣べ伝えずばまことに禍いなるかな」(コリント第1書9・16)。これはパウロの言でありまして、すべて言いつくされぬ歡喜をもってキリスト教の福音の宣伝に従事する者の声であります。この歡喜がなくて、このおさえきれぬ感謝がなくて、キリスト教の伝道はかならず失敗であります。(『一日一生』8月5日)

キリストの福音といいますと、これは喜びのおとずれということが出来ます。キリストによって自分の罪が赦され、神様との関係を保つことができたということからくる喜びですね。この喜びを伝えることが伝道ですね。この救いの喜びを何かの形で伝えたい、人に知らせたいということから伝道は始まっているのです。医療伝道とか、農村の伝道とか、これらは神様の恩恵を伝えるということから起こっているんですね。キリストの愛に感じて、どうしてもこれを人に示さなければならない、知識のある人は知識をもって、能力のある人は能力をもって、体力のある人は体力をもって、無い人は無い人として存在そのものをもって、それぞれの生涯をもってこの福音を証明するということですね。

この罪の赦された喜び、この喜びは今まで人間には自分のうちになかった喜びなんですね。今までは何かもらってうれしいとか、あるいは頭が良かったからうれしいとか、自分がいい家に生まれたからうれしいとか、そういうようなうれしさとは全く違うんですね。そのような何かがあるからうれしいというんじゃないくて、もう、その喜びがこみ上がってくるんですね。それは存在そのものがうれしいということなんです。

私のようなこんなちっぽけな者でも、自分はキリストを知らない時には、年中泣き面をしておった。まことに喜びというものがなかった。子どもらしい喜びがなかった。ところがいつかキリストの福音に接して、私というものは全く変ってしまった。そして私が変わったからこんどは私の生涯が変わってしまった。喜びの福音が私の中に入ったから、私はもういても立ってもいられない。いろんな困難はあっても、私の中に燃え上がる喜びというものは、

どんなものをもってきても消すことはできない。そしてこの喜びが50何年間のあいだ私に働いて、いや私を動かして今日来た。

そこで私はもういいかげん年をとったから、これでやめたい、いろんな苦労をしたから、わるいけど私は本当のことをいえば、もうこらでしめくくりをしたいというような気持ちがわかないことはない。ところが神様は「そうはお前いかないぞ!」「お前はそうはいかないんだ。もっとこの喜びを伝えなきゃいけない」と、またこんなぶっこわれかかった体を神様はまた追いたててもっていきなさろうとしているんですよ。いつまで神様はそうなさるのか知らない。とにかく、この喜びが私から消えちまえば、これはもう今から20年か30年前に消えちまった。けれど私にね、何かもらうとか名誉とか、そんなもので喜んでいる喜びでない喜びが私の中に燃えている。この燃え上がる福音の喜び、これはキリストが天から持ってこられた喜びですね。この福音に接した時に人間はみんな変わってくる。今まで泣き面していた人生をかこっていた人が変わっちゃうんですね。

この福音の伝道というのは口で言うばかりではない、あらゆる方法をもって神様の喜びを伝えることが伝道なんです。われわれの中に、たまに、話したり書物を書いたりすることだけが伝道だと思う人がいるけど、これは間違いですね。あの電話を発明したベルさんですね、ベルさんはあんな偉い立派な発明をするつもりで電話を発明されたんではないんですね。自分の奥さんが聾啞であったから、その奥さんと話がしたかった。愛です。奥さんと話をしたいと考えたために、それが電話になってあらわれてきたんですよ。小さな愛小さな喜びを伝えたいという、その気持ちが、ああいう大きなことになってくるんですね。ですから、この「光の家」でも、何があなくても、それがなくてはならないもの、一番あらなければならないものはキリストの福音です。それも錆かかった福音じゃない、いつも新しくされた福音ですね。何か型を作って、そこにがちりはめ込んでしまった福音、そんなものは死んだ福音だ。そうじゃなくして、本当に愛に満ちた喜び、われわれがそういう喜びをもっている時、私たちはみんな神様の証明者なんですね。だから、われわれもしも喜びがないというならば、もう一ぺん新しく神様との関係を持たなきゃな

らないですね。ただ毎日毎日惰性的になっていてはいけません。

6. 神 の 愛

1963（昭和38）年「東京光の家」で 71歳

ヨハネ第1の書第4章19節から21節

わたしたちが愛し合うのは、神がまずわたしたちを愛して下さったからである。「神を愛している」と言いながら、兄弟を憎む者は、偽り者である。現に見ている兄弟を愛さない者は、目に見えない神を愛することはできない。神を愛する者は、兄弟をも愛すべきである。この戒めを、わたしたちは神から授けている。

もっとも善きことは、キリストを信じ、彼にありて善をなすことなり。すなわち彼に善をなさしめらるることなり。そのつぎに善きことは、キリストにならい、彼をまねて善をなすことなり。そのつぎに善きことは、キリストにならい、彼をまねて善をなさしめらるることなり。そのつぎに善きことは、キリストを知らざるも、天然の声に聴きて善をなすことなり。さらに恕すべきは、無知無識の結果、善をなしえずしてつねに神の聖旨に^{もと}戻ることなり。されども最も悪くして全然恕すべからざることは、キリストを知り聖書を研究し、神学を講じ、キリストの神格を論じながら、兄弟を憎み、その^{かんせい}陥穽を計画し、彼らの墮落するを見て心に喜楽を感じるることなり。神が憎みたもう者の中に、信仰篤くして（篤しと称して）罪を犯す者のごときはあらず。

（『一日一生』9月3日）

神様は、私どもが愛するからそれだから神様は私どもを愛して下さるというふうに考えますけれども、そうじゃない。私どもが愛さなくても、神様は、私どもが神様に背中を向けておっても、神様は愛していらっしゃる。こういうのが、聖書がこの私どもに教えてくれますところの、神様が私どもを愛するということです。本当の愛というものは、こちらが愛するから向こうがそれに対して愛を起こすいわゆる魚心あれば水心という普通の愛ではない。神様の愛は、そうじゃなくて、こちらはですね、もうどんな

であっても、神様は私どもを愛するのであります。で、神様を愛するということと、人を愛するということとは、これはちょうど車の両方の輪のように、これはどちらも大事で、この二つで人間は生きていくことができるんです。だけれども、それが、まずその愛というものは、神様の大きな愛に感じて、そして人を愛する。私どもは、人を愛するということは、簡単なようであって容易なことではありません。私どもは、私どもが愛し、私どもに非常な好意を持ってくれる人を愛するということは、これはそうむずかしいことじゃありません。けれども、好意を向けないで、こっちの心をちっともとってくれない、そういう人を愛するという場合は、これは本当に容易なことではありません。その時に、自分は神様からいったいどういうふうにあ愛されたかというならば、私どもはですね、神様を愛したから神様は私どもを愛したんじゃない。私どもを愛さなくっても神様は愛したんだ。その愛を、私どもは神様からいただいて、初めて私どもが人を本当に愛しうることができるのであります。私どもは、まあこれは無理のないことでありますけれども、普通であると、私どものところにいた人でもですね、外に行ってしまうと、よほどの人でないと便りをしない。全く絶えてしまう。あの人はどうしたんだろうと思っても、いるところがわからなかったり、いろんなことで便りがこない。たまたま頼ってくると、自分は行きづまった。この道をどうかして開いてほしいというような頼みにやってきます。これは、私どもは当然そのお役に少しでも立てば、それをするのが当たり前でありますからいたしますけれども、実は私どももですね、神様に対して用のない時には、神様に対して考えない。けれども、友達に話しても頼りにならない。そして、どうにもこうにもいかない時に、神様に頼っていく。こういうような状態は、常に私どもがとっております。それで私どもは本当にこの神の愛をもって、私どもはこれに臨む。で、この私は心でね、本当に愛するということは、心の結果として物が生まれてくる。心のないもらい物はあんまりうれしくない。どんな小さなものでもね、心を持ってきてくれる人にいただいたものは、非常にありがたい。けれども、心のない、心がなくて物をもらうとあんまりうれしくない。で、この愛というものは、物を与えると、そ

ういうものじゃない。本当に心ですね。その人を愛する、ある場合には、その人は、その人に対して非常に冷たく感じる時がある。けれども、こちらがですね、神様の愛をもってその人に対する。けれどもそれは、本当に後でわかってきますけども、私どもはですね、かわいがるということは、物でもたくさん子供に食べさせるとか、あるいは何をしても勝手にさせておくということがかわいがってるんだというふうに考えますけれども、それはかわいがってんでもなんでもない。ある時には、自分のお父さんがなんという冷淡なお父さんだろうと、こういうふうに思う、思う時であっても、ある時にはそういう態度に出なきゃならない。物をあげていい人と悪い人とある。その人が本当に神様と自分とに、もっと自分を発見するためには、物をあげて悪いこともある。そういう場合には、私どもは、本当に物をあげないで神様のお力がその人に加えられるようにと、後で私どもはそのために祈るんですね。世の中の愛と、神様がキリストをもって、罪を贖って下さった十字架の愛とは、天地の違いがある大きな愛である。私どもが神様を愛したんじゃない。神様が私どもを愛したために、それに対して私どもは愛というものを覚えて、そして、人々を愛することができる。だから、真の意味の人格の神様を、私どもは本当にこれを愛さなければ、そこに、清い正しい愛ってものはないんです。ない。だからまず私どもは、人間を愛することと、神様を愛することは、二つが同じようなことの両輪のようであるけれども、しかしまず神を愛してですね、そしてその神様の愛を本当にいただいて、そして私どもが人を愛さなければですね、決して人間は、人を愛して、愛し続けていくということは、これは容易なことじゃなくて、できないことです。そういう愛の泉を神様から、いただかなきゃいけない。そして、くんでもつきない、くんでもつきない愛を人に注ごうとするならば、自分にはもちろんないんだから、他方において、神様の生ける生命を自分のうちにくみとって、そうして人を愛する時に、その愛が本当にこの、本当のこの生命のあるところのこの愛をすることができるんですね。私どもよく聞くあの佐倉宗五郎という名主が、村民を愛して、領主堀田の悪税に苦しむ村民たちのために将軍に直訴して妻子ともに磔にされました。彼は憎しみをもって

領主を恨みました。これは普通の人間がもったところの愛でありますね。彼は堀田の治める28か村を愛したけれども、ひどいめにあわせられた時に、彼は憎しみをもってその領主に幽霊になって出たというような話がありましたね。そういう、普通愛には程度がある。人間の愛というのはそういう愛をいう。まず似たような愛である。けれども神の愛は、キリストの愛はどういう愛か。われわれが殺される時に、その人のために、何かの形で、彼を憎み殺してやろうとこういうふうを考えない。ステファノという人が殺される時も、本当に輝いた顔をもって、そして彼は現在から将来の祝福を祈って最後をとげた。その態度を見てですね、非常に、そのいろいろなまあ迫害した人が感じたんです。これはもう恐ろしいこと、偉いことなんですね。憎しみにかえて愛をもって勝利を得たってわけなんですね。で、それを見たいまのパウロという偉い伝道者の方が起こったのは、その態度を見てですね、恐ろしく感じたんですね。憎しみをもってくるならそんな問題じゃないけれども、自分のいじめたあのステファノがですね、私どものために、神様に祝福を祈ってた。これは人間の今までの愛ではない。これはもう神の愛である。そういう愛が表れる。われわれの間にはないんです。その愛は神様が、神様の愛が、人間に与えられる時にですね、自分の情に勝ち、勝ってその愛するんですね。自分は憎む。自分にいろんな危害をかける者を憎むってことは普通の情でしょう。それにうちかって愛するということは、これは言うことは言うけれども人間にはできません。けれども神の愛は、人間の情にうちかって、その愛をですね、人に与えることができる。そういう愛が、この宇宙にひそんでいるということをまず私どもが知る必要がある。そして、それは今もですね、どこにあるかということはわかりません。けれどもその愛をですね、経験した人はよく知ってる。その愛が神の愛、神の愛だから、神はやたらですね、罰するなんてことは、容易なことではそういうことはなさない。これは必ず恵みとして帰さなかったらやまないところの刑罰、罰というものがくることがありますけれども、恵みとして帰ってこなければ神様はどうしてもやみたまわないというのが、神様の御心なんです。

(注) 罰は悔い改めて神に帰らせ、一層の祝福を与えたまわんがために下

る。(ヘブル12・11、エゼキエル18・31・32)

7. ナザレのイエス

1963(昭和38)年「東京光の家」で 71歳

使徒行伝第3章6節から8節

ペテロが言った、「金銀はわたしには無い。しかし、わたしにあるものをあげよう。ナザレ人イエス・キリストの名によって歩きなさい。」こう言って彼の右手を取って起こしてやると、足と、くるぶしとが、立ちどころに強くなって、踊りあがって立ち、歩き出した。そして歩き回ったり踊ったりして神をさんびしながら、彼らと共に宮にはいって行った。

伝道は心靈的事業なり。われに神恩の足るあるがゆえに、われに神に対する報恩として、われの同胞に対する同情心よりして、われはわが心中の無限の慰藉を他人に分与せんと欲す。われにもし財貨の分与すべきあらば、われはもちろん喜んでこれを神にささげて世の孤独者を慰めん。されども金銀いまはわれにあるなし。われの有するもの、すなわちナザレのイエスの救済力、われはこれを世に供して世の貧苦を医やさざるべからず。ゆえに伝道師たらんと欲する者には、まずこの富裕、歓喜、平和の充満して抑圧しうべからざるものなかるべからず。彼にまず歓喜のこの無尽蔵あるにおよんで、彼は世の貧者をみたしうべし。

(『一日一生』9月4日)

イエスさまのお弟子さんのペテロ、ヨハネこれは、お弟子さんの一番偉い人で、ここに書いてありませんけれども、ちょうど日本でいいますと、浅草の観音さん、まあ浅草の観音さんというよりは明治神宮ですね。ちょうどこのエルサレム、神さまの宮です。そこにですね、物を乞うておる人がですね、入口にみんな座っておる。いざりとか、いろんな人が座っておる。ところが、そう大勢いなかったんでしょう。で、まあひとりのいざりですね、くるぶしが立たない。くるぶしがきかない。これはきっと、相当もう長い間、こんな状態でおったんです。で、このお弟子さんのペテロとヨハネが、ちょうどこ

のエルサレムの宮にはいろいろとした時に、物を乞うていた。そして二人の人に目をつけて、私どもは困っております。非常に困って働くこともできません。どうか何文かをいただきたいと、こう尝试してみました。ところが、ペテロもヨハネも、キリストのお弟子ですから、決して余分なものは、持っておりません。お金がなかった。「あなたは私に何を欲しいというのか」「どうかその少しでもお金がいただきたい」「私どもはお金はない」と言ってですね、それだけで断わらなかった。「お金はないけれども、私たちにあるものをあげる」と、ここに値打がある。普通の人であれば、お金はない。お金はありませんと言ってしまっただけけれど、そこがイエスの弟子である。お金はないけれども、「イエス・キリストの名によって立ちなさい」と、こう言った。こういうことを言った時にですね、こう言うから、立てと言うからまあ立ったんですね。そしたら、そのくるぶしが動いて、いままで長い間動かなかったところが動いたんだから、非常に喜んだということですね。で、ここにですね、右の手で、これはペテロでしょうね、右の手を出してですね、立ち上がる時に助けたんです。右の手を、こういうところがですね、非常に、小さいことであるけれども、これは非常にこのことが本当だということが、こういうことにおいても、われわれ教えらる。右の手が決め手ですね。ちゃんとそのままここに書いてですね、それが残ってる。右の手で助けた。で、立てた。ところがうれしくて、うれしくて、踊って踊ってですね、もうその足の、いわゆる、足の踏むところを知らずというわけ。そして、その宮に一緒にはいっていったと、こういうことですね。で、これはですね、金銀がもちろん大事である。けれども、金銀以上に神様の力、これがですね、それ以上に大事である。いよいよになった時ですね、金銀で役に立たなくなる時がある。本当のこの例えはですね、まあ精神上のいざりがあるでしょう。そういう人にですね、金銀をいくらやったってどうしようもない。いざりは立たない。精神上的の腰ぬけです。もうどうもできない人がたくさんあるでしょう。お金をもっててもですね。握りながらもうどうすることもできない人がたくさんある。それ以上のものがなければですね、どうにもならない場合がある。そのようにですね、このいざりを医者で、どうしても治らない。これはまあ

障害者の医者で治せば治る人はあったけれど、治らないで障害者という人たくさんあるでしょう。そういう場合にですね、障害者を、どれだけ金を出しても彼のこの精神はなぐさめられない。障害者のことを考えて、いろいろこの社会福祉のことでこないだも、いろいろこの障害者の問題で話が出た。で、ただですね、障害者の問題は設備をよくすると、そしてもう何もかも、自分が動かなくてもいいように、何でも行き届くようにしたからといって、その障害者はしあわせにならない。これが、もっとそれ以上のものが必要だということがわかる。設備をよくして、朝から晩まで困らないようにしたところで、精神的のいろいろの問題、もがきというようなものは、それだけではだめなんです。それはやはり、私どもから言えばですね、ナザレのイエス、イエスの精神、生命、そして私はあまりキリスト教と言いたくない。イエス・キリストの生命、これが大事だ。あるいは他の宗教の人ではいろいろ言いましょう。とにかく精神のことをもっと考えなければ、障害者の問題は解決しないんだということを、非常に、非常にそのことを考えております。そのように、この今の病気のこの人が、たとえここですね、そのペテロとヨハネがじゃっかんのお金をくれたって、それでは彼は行って使っちゃう。食べちゃう。それで終わっちゃう。けれども、ナザレのイエス・キリストにおいて立ちなさいといって、立たしてくれたことによって、彼は新しく生きることができたんです。生きることができた。それで、今日本あたりでも、障害者の問題はみんなそうでしょう。精神をどうするか、盲人であればですね、なぜ自分のできることはやらないかということです。これが重大なんです。重大なの。何だってですね、生きていればですよ、何か自分でその一日のうちに、できることがあるはずですよ。それを見つければその力はなんだ。それは、どんなものをもらったって、どんなにあたたかくしたって、それだけじゃ見つからない。それは、私どもは、万物の主でありたもうキリストのその生命に接する時に、彼は、盲人であれば盲人なりに、やれるはずである。弱い盲人であってもですよ、弱い盲人なりにですね、なんかやれるはず。けれども、内が死んでおればやれない。内が死んでおれば、そこが大事なとこです。そこが、わからないですね、どんなもういろんなことを言ったってですね、だ

めだ。例えばですね、盲人の仕事の問題でもそう、真剣に、本当にそのそれを本当にやっていくかいかないか、それと本当に取り組んでいかなきゃ、その熱意です。そうするならですね、日本の失明者には新しい仕事はもちろん生まれてくる。それでなくても、世の中の目あきの人が真剣にものやってるんだから、欠けてる障害者が真剣にやらなかったら、ものは成立してありません。そのように私どもが、ナザレのイエス・キリストの生命が私どもにはいり込んだ時に、その人間は新しくされる。この今のいざりが、くるぶしをペテロとヨハネにもらった。ナザレのイエスをもらったことによって、彼の生涯は変わってくる。それで、そういう意味でですね、私が日本において、ナザレのイエスが、障害者ばかりじゃない、すべての人に必要だ。キリスト教とは言いたくない。私はね、ナザレのイエスが必要だ。ナザレのイエスの肉を食べる。ナザレのイエスの血を飲む。これによって人間が変わってくる。これはもう2千年間、そのことの事実はあまりに強固でしょう。それを見出さなきゃいけない。私は、そのことを見出すことによってですね、日本の盲人はまるで変わってくると思う。こないだも光明寮の青年が来て、私と話した。盲人のうちの半数以上は、自分の習った職業を満足していない。卒業したら、まあ2年とか3年とか、その間は、初めはここでもって日を暮らすことができるからいいあंबあいだと思った。けれども卒業してくると、もう日を暮らす場所がなくなった。さてそうなったらどうするか。どうしたらいいか、この心配した。今度2、3人の人がこの次の日曜日、先生にいろいろ相談してほしいから連れて来ると言っただけ。なんでもない。ナザレのイエスを頼むこと、ナザレのイエスを我が財産とすること、そうすりゃ、彼等は自分のいまの職業をもちろん満足するし、まだまだ他のことも生まれてくるはずだ。そんなこと普通の人にはわからないでしょう。ナザレのイエスは何で私に関係があるんだ。ナザレのイエスがいたってしょうがないじゃないか。私どもはそのナザレのイエスをですね、私どもは本当にその自分のものにする時に、そうする時に、国の補助も、社会の同情も益をもつんですよ。そういうことをしないですよ、日本の盲人は。本当に、今のこの人のように、踊って喜ぶ、毎日を喜んでいくようになるものをおくらなくてはだめなんです。どんな人

が来て、いろんな激励したところで、物をくれたって、これはありがたいことじゃありません。それでいつまでもそれは続かない。それはナザレのイエスをいただくことなんです。この今のヨハネとペテロはですね、何十万の金をこのいざりにやったよりも、いざりにとってはナザレのイエスをペテロからもらったということが、彼の生涯を突き通して、しあわせにした。私どもですね、ここでもう何年間それを説いている。聞こうが聞くまいがかまわない。真理であるから説く。私があなた方に、それを教えるんじゃない。私の経験をですね、くり返し、くり返ししゃべる。信じないならば、信じないで、そんなことは問題じゃないと、私は考えてるんです。もしも信じる人がなかったら、この庭にあるところの、いろんな木がですね、喜んでくれるでしょう。しかしながら、これは本当だから説くんです。私は何もキリスト教の伝道師の商売じゃありません。だから、私は伝道のためにお金をもらったことは一ぺんもありません。けれども、それはかまやしない。そんなことじゃない。それが本当だから説く。真理だから説く。これはもうこれを説けばですね。そのうちから本当にナザレのイエスをいただく人が出てくるはずですよ。出てこなくても、それが後になって出てくるかもしれない。こういうふうな気持ですね。私は、何年もこうやってくり返してるんですよ。何もよくわからない人間は、私がヤソに引き込むとか、今ここにいる人は、たいがいわかっているから、私がそんなことのために、聖書を話してるんじゃないということは、たいがい知ってるけど、知らない人はそんなこと言う。そうじゃない、真理だからです。引き込むとか、自分の味方にするなんて、そういうことじゃない。このナザレのイエスをですね、本当に食べることによって、いただくことによって、人間の生涯は変わってくる。そして生きた人間になる。そいでなかったら、どんなことをしてもですね、日本の失明者にはしあわせはこない。失明者ばかりじゃなく、障害者にしあわせはこないということあまりにはっきりしていることですね。

立ち読み版はここまでとなっております。

続きをお読みにになりたい場合には
社会福祉法人 視覚障害者支援総合センター
までお問い合わせください。

盲先覚者伝記シリーズ No.2

秋 元 梅 吉

— キリストの証しそのものの人 —

1985年1月10日 初版 発行

1996年8月20日 第3刷 発行

定 価 800 円 (送料 240 円)

著 者 岩 島 公

発行者 高 橋 実

発行所 視覚障害者支援総合センター

〒167 東京都杉並区上荻2-37-10

Keiビル3F

電話 03 (5310) 5051

振替口座 00110-4-576094

印刷・製本 合同印刷株式会社

〒130 東京都墨田区業平2-9-13

電話 03 (3624) 6111

日本盲人福祉研究会

定価800円